

*Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*の *Usage Paragraphs*について

藤本 和子

1 *Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary* (2008) (以下 *MWALED*) は、米国のMerriam-Webster社が初めて出版した学習者用辞典である。学習者用辞典といえば、英国出版社のものがよく知られているが、アメリカ英語の学習者用辞典としても、*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners of American English*、*Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English* や *Longman Advanced American Dictionary* などのように、英国の出版社が出版したものが主なものとして挙げられる。それゆえ、米国出版社による本格的学習者用辞典として *MWALED* は一層注目されると言ってもよいだろう。

MWALED はどのような特徴をもつのだろうか。辞典全体の主な特徴については、次の章で述べることにしよう。本稿では主に、*MWALED* の本文中のボックスに入ったノートである *usage paragraphs* の記述について分析し、さらに、それらとその他の主要な上級学習者用辞典の記述と比較してみたい。*MWALED* と比較する辞典は、*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*² (2007、以下 *MED*²)、*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*³ (2008、以下 *CALD*³)、*Collins COBUILD Advanced Dictionary of English* (2009、以下 *CCADE*)、*Longman Dictionary of Contemporary English*⁵ (2009、以下 *LDOCE*⁵)、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*⁸ (2010、以下 *OALD*⁸) 及び、アメリカ英語辞典である *Collins*

COBUILD Advanced Dictionary of American English (2007、以下 CollinsAM) と Longman Advanced American Dictionary² (2007、以下 LAAD²) の合計7種類の辞典である。MWALDの *usage* paragraphsの記述と上記辞典の記述の比較により、その内容の類似点と相違点について、また現代アメリカ英語の諸相をつかむことを本稿の目的とする。

2 MWALDの主な特徴を見てみよう。序文 (p. 7a) によると、MWALDは、アメリカ英語とイギリス英語の両方を収録し、その収録範囲について、イギリス英語に関しては“current and comprehensive”、アメリカ英語に関しては“unparalleled”としている。

収録語数は、およそ100,000項目であり(参考までに、OALD⁸は184,500項目、LDOCE⁵は230,000項目である)、文化、ビジネス、スポーツ、科学技術などの幅広い分野の語が掲載されている。収録語の選択にあたっては、日常生活の中で必要とされる語を掲載したと述べられている。Merriam-Webster編集者によって選ばれた学習者が知っておくべき重要基本語3000語には、学習者に分かりやすいように青色の下線が引かれている。しかし、これらの3000語はどのような基準によって選ばれたのかは辞典の中では述べられていない。

MWALDが基づくデータベースはどのようなものであろうか。本格的にコーパスデータを活用したCollins COBUILD English Language Dictionary (1987) の出版以降、英国出版社の学習者用辞典を中心に、それぞれのコーパスや学習者コーパスに基づいての編纂が盛んである。MWALDの序文 (p. 7a) によると、本辞典は、1億語以上からなる“citation text”のデータベースに基づいているとある。人間の手による従来の収集方法による用例に加え、インターネットや、データベースLexis-Nexisを利用して入手されたものも含まれる。英国出版社の学習者用辞典では、独自の学習者コーパスの分析により、辞典の記述に活用するものも見られるが、MWALDでは、独自の学習者コーパスについては言及されていない。

次に用例であるが、160,000以上の例文が掲載されており、本辞典のblurbには、“the most of any learner’s dictionary”とある。LAAD²は、73,000用例、OALD⁸は

86,000用例、LDOCE⁵は165,000用例である。LDOCEは、第4版(2003)は155,000用例であったが、その後、第5版(2009)では、165,000用例の掲載となり、MWALDと肩を並べるか、あるいはそれ以上となっている。辞典の用例掲載の方針については、コーパスなどからの原文に忠実なものに掲載すべきか、教育的配慮のもと、原文に手を加えたり、辞典編集者が作成したものを掲載すべきかなど、どの方針が望ましいかについてはこれまでも様々な議論がなされている。MWALDの用例は、アメリカ文学とイギリス文学の有名な作品からの引用もあるが、大部分は、実際に用いられた英文に基づいて辞典編集者によって作成されたものである。¹⁾ MWALDの特徴として、用例は学習者が情報をすばやく見つけられるように青色で印刷されている。用例によっては、角括弧に入った意味の説明が与えられているものもある。例えば、²aの項目には、A Mr. Smith [=a man named Mr. Smith] called to ask about the job.や、A triumphant Ms. Jones greeted her supporters. [=Ms. Jones was triumphant when she greeted her supporters] などがある。このような工夫からも学習者への配慮がうかがえる。

ボックス入りのノートとしては、本稿で取り上げる *usage* paragraphsの他に、*synonyms* paragraphsがある。これらのボックス中の例文も、本文中の例文と同様に青色で掲載されている。²⁾

3 MWALDの *usage* paragraphsについて見てみよう。エントリー中に49項目の *usage* と名称の付いたボックスが設けられている。本稿では、*usage* paragraphsの各項目を、ボックスが掲載されている見出し語で呼ぶことにする。³⁾

本稿ではこれらの49項目を、1) 綴りに関するもの、2) 語義に関するもの a) 単語の混用に関するもの、b) 特定の意味用法に関するもの、3) 語法・文法に関するもの、4) 社会・文化などに関するものの4つのタイプに分けることにする。それぞれのタイプの項目は次の通りである。

1) 綴りに関するもの (4項目)

alright cannot have sulfur

2) 語義に関するもの

a) 単語の混用に関するもの (3項目)

affect ¹altogether cleanse

b) 特定の意味用法に関するもの (2項目)

flaunt fortuitous

3) 語法・文法に関するもの (30項目)

ain't ¹amount ¹any
anymore ¹can data
different ¹don't ²either
¹family ¹fish fizzle
have got (s.v. have) ¹less ¹let
⁶like ⁷like ²likely
¹matter ¹me ²neither
¹shop ¹staff ¹take
²than ²that ⁴that
¹this ²used to whom

4) 社会・文化などに関するもの (10項目)

actor American English ¹Asian
deceased dinner ²female
goddamn insane ²male
Native American

これら49項目のうち、アメリカ英語についての記述がみられる項目は、**American English, anymore, dinner, ⁶like, ²likely, sulfur**である。そして、アメリカ英語とイギリス英語の違いについての記述がみられる項目は、**¹Asian, different,**

¹family, fizzle, ¹shop, ¹thisである。

それぞれの例を見てみよう。以下、本稿で紹介する *usage paragraphs* の記述は、項目によっては抜粋の場合があることをお断りしておく。

アメリカ英語についての記述がみられる項目

anymore

Anymore is usually used in negative statements and in questions. ▪ Does she live there *anymore*? In some parts of the U.S. it is also used informally in positive statements. ▪ I've been seeing them a lot *anymore*. [=I've been seeing them a lot lately/recently]

アメリカのある地域で、*anymore* が “lately/recently” の意味で肯定文で用いられる *informal* な用法は、本稿で *MWALED* と比較した7つの学習者用辞典のいずれにも掲載されておらず、*MWALED* のみに見られる情報である。

²likely

In U.S. English, the adverb *likely* is often used by itself without *most, quite, very, etc.* ▪ He will *likely* [=probably] be late. ▪ It will *likely* rain tomorrow. This use of *likely* has sometimes been criticized, but it is very common. It does not occur in highly formal writing.

アメリカ英語において、副詞の *likely* が、非常に *formal* な書き言葉以外で、しばしば、*most, quite* などの副詞と共にではなく、単独で用いられる用法についての記述である。比較した学習者用辞典のうち、*CALD*³には、そもそもこの語の副詞としての用法は掲載されていない。その他の辞典では、いずれも *likely* と共に副詞が用いられた用例が掲載されている。*OALD*⁸のみが、*informal* なアメリカ英語で、この語がしばしば単独で用いられるという *MWALED* と同様のアメリカ英語についての情報を掲載している。

アメリカ英語とイギリス英語の違いについての記述がみられる項目

¹Asian

In U.S. English, *Asian* refers usually to a person from the countries of eastern Asia, such as China, Korea, and Japan. In British English, *Asian* often refers to a person from the countries of western Asia, such as India and Pakistan.

アメリカ英語とイギリス英語における Asian の意味の違いは、それぞれの国とアジアの国々との地理的な距離が反映されていて興味深い。Asian のアメリカ英語とイギリス英語の意味の違いについては、本稿で比較した学習者用辞典のうち、LAAD²以外はすべて掲載している。アメリカ英語辞典である LAAD² は、この語の意味に関して、アメリカ英語であるという情報の提示なしに、アメリカ英語の意味のみを掲載している。アメリカ英語辞典であるので、このことは当然とも言えるが、学習者にとっては、MWALED などのように、アメリカ英語とイギリス英語の意味の違いについての情報があると役立つであろう。

4 MWALED の *usage* paragraphs と、その他の上級学習者用辞典の記述内容を比較してみよう。比較する学習者用辞典は第1章でも述べたように、MED²、CALD³、CCADE、LDOCE⁵、OALD⁸、CollinsAM、LAAD² の7つの辞典である。これらの辞典もボックスノートに掲載しているが、それらの名称や種類は様々であるため、MWALED の *usage* paragraphs で取り上げられた項目に関する記述が、各辞典のボックスノート、あるいは本文中に掲載されているか、もしそうであるならば、その記述内容に類似点や相違点はあるかについて見ていく。

MWALED の *usage* paragraphs で取り上げられている項目が、その他の辞典でもボックスノートで取り上げられているとは限らない。各辞典でどのように取り上げられているのか、MWALED の *usage* paragraphs の語法・文法に関する項目の中から、いくつか例を見てみよう。まず、ain't は、MWALED は *usage* paragraph に取り上げられているが、他の7つの辞典では、エントリー中に、“spoken” や “not standard” などの記述が掲載されており、ボックスは設けられていない。一方、MWALED の ¹less

の項目にみられる、less は（通例）数えられない名詞と共に用いられることについての注記は、OALD⁸ は、ボックスノートではないが、short note に、その他の6つの辞典にはすべてボックスノートに入った記述が見られる。中でも、MWALED は、数えられる名詞であっても、それらが “distances” や “amounts of money” などをあらわす場合は、less のほうが fewer よりも用いられやすい傾向にあるなどのような具体的な記述を掲載しており、他の辞典よりも詳細な情報が見られる。さらに、MWALED の whom に見られる、whom は who よりも formal な語であるという主旨の記述は、他の7つの辞典すべてにボックスノートが見られる（LAAD² は、who の項目にボックス）。特に、less や whom のように、MWALED 及び、他の7つの学習者用辞典が注記を掲載しているということは、これらの用法は英語指導の中でも、必要に応じて学習者に注意を促すとよいと言えるだろう。

MWALED の *usage* paragraphs の49項目の中から、4つのタイプ別に、いくつかの項目を見てみよう。

4.1 綴りに関するもの

(1) cannot

In speech, *can't* is much more common than *cannot*. In formal writing, *cannot* is much more common than *can't*.

話し言葉と書き言葉における can't と cannot の区別についての記述である。比較した辞典のうち、MED²、CCADE、CollinsAM にはそれぞれ、can と can't の両方のエントリーに MWALED と同様の記述があるが、CALD³、LDOCE⁵、OALD⁸、LAAD² には話し言葉と書き言葉の区別についての注記はない。筆者が担当する大学生の中にも、短縮形とそうでない形を formal/informal の区別なく使用する学生が見うけられる。そのような学習者には、MWALED のこの注記は参考になるだろう。

MWALED には注記が見られないが、can の否定形については、1語綴りと2語綴りの問題も気になるところである。筆者が担当する大学生の英文において、can not のように、2語綴りがしばしば見うけられる。本稿で比較した学習者用辞典では、

CALD³が**cannot**の項目に、“**Cannot** is always written as a single word.”のように1語綴りを用いるように注記を掲載している。Garner (2003: 126)やCCEU² (2004: 87)にも、2語綴りを容認しない記述がある。MED²の**can**の項目のボックスには、**can**の否定形が1語綴りにされるのは“almost always”とあり、2語綴りを含む例文には×マークではなく、疑問符が付されている。MED²では、2語綴りについて多少緩やかな態度がとられていると言えようか。辞典などの記述からすると、学習者は1語綴りを用いるのがよいと考えられるが、MWALDにも、**can**の否定形の1語綴りと2語綴りについての注記があれば、学習者にとっては役に立つのではないだろうか。

(2) sulfur

In U.S. English, the spelling *sulfur* is chiefly used in technical writing, while both *sulfur* and *sulphur* are common in general writing.

MWALDの*usage* paragraphsの綴りに関する項目の中に、なぜ**alright**、**cannot**、**have**と共に、特定の分野の語である**sulfur**が選ばれたのだろうか。OALD⁸は、**sulphur**のエントリー中にsulfurとsulphurの綴りについて、前者がthe International Union of Pure and Applied Chemistryとthe Royal Society of Chemistry in the UKで採用されているが、後者の綴りもまだイギリス英語などで通例用いられているという旨のshort noteを掲載しているが、その他の辞典には、ボックスノートは設けられていない。LAAD²以外の辞典には、この語のアメリカ英語とイギリス英語の綴りの違いについての記述が見られる。

4.2 語義に関するもの

ここでは、単語の混用に関するものの中から例を見てみよう。

(1) cleanse

The verbs *clean* and *cleanse* both mean “to make (something or someone) clean.” *Cleanse* usually refers to making the body or part of the body clean. ▪ *cleansing* the skin ▪ The herb is believed to *cleanse* the body of

toxins. It can also refer to making a person’s mind, soul, reputation, etc., clean. ▪ The ceremony is meant to *cleanse* people of their guilt and sin. . . . *Clean* is more common than *cleanse* and its use is less specific.

Cleanseとcleanの意味の違いについての注記は、MED²、LDOCE⁵、OALD⁸にも見られる(いずれも**clean**のエントリーにボックスノートあり)が、MWALDの*cleanse*の対象に関する情報や、**clean**のほうが*cleanse*よりも普通に、そして幅広く用いられるという情報が、*usage* paragraphにまとめられていることは、学習者にとっては理解しやすいであろう。

4.3 語法・文法に関するもの

(1) ¹can

Could is used as the past tense of *can* to describe an ability that someone had in the past or to say that something was possible in the past. ▪ *I could* run fast when I was young, but I can’t run fast now. ▪ It used to be that you *could* drive for miles here without seeing another person, but now there are houses and people everywhere. To describe a specific occurrence in the past, use *was/were able to* instead of *could*. ▪ By working long hours, we *were able to* finish the project on time. . . .

過去における“a specific occurrence”を表すのに、*could*ではなく*was/were able to*が用いられる。比較した学習者用辞典では、MED²、CCADE、OALD⁸、CollinsAMが*could*と*was/were able to*の使い分けについての注記を掲載している(4つの辞典ともボックスノート中に記述掲載。MED²は**can**¹と**could**のエントリーに、CCADEとCollinsAMは**able**のエントリーに、OALD⁸は**can**¹のエントリーに掲載)。

参考までに、*could*と*was/were able to*の使い分けについて筆者が日本人大学生に行ったテスト結果を見てみよう。ここでは、2009年度と2010年度の文学部1年生、それぞれ36名と30名に行ったものを紹介する。以下の英文中で使われるものとして、

couldとwere able toのいずれか適切なほうを選び、なぜ適切であるのかその理由を書いてもらった。

a) Even though the restaurant was crowded we (were able to / could) find a table.⁴⁾

結果として、were able toを選んだ学生は2009年度が18名(50.0%)、2010年度が12名(40.0%)であったが、なぜここではwere able toのほうが適切であるのか正しい理由を書くことができた学生は2010年度の学生1名のみであった。実際に、couldとwere able toを状況によって区別しないで、同じ意味で用いている学生が少なからずいるのではないだろうか。より効果的なコミュニケーションを目指すには、MWALDなどに見られるcouldとwas/were able toの用法についての指導が必要であろう。

(2) different

In both U.S. English and British English, one person or thing is said to be *different from* another. *Different* is also often followed by *than* in U.S. English. Some people believe that *different than* is incorrect, but it is very common. In British English, *different* can be followed by *to*. *Different to* is not used in U.S. English. . . .

Differentの後ろにくる前置詞について、fromはアメリカ英語とイギリス英語の両方で用いられ、アメリカ英語ではthanが、イギリス英語ではtoも用いられる。

これら3つの前置詞の掲載については、辞典の間で差異が見られる。Table 1は、各辞典が、前置詞from/than/toのうち、differentの後ろにくる前置詞として、differentのエントリー中に掲載しているものを表す。

Table 1 Differentの後ろにくる前置詞from/than/toの掲載

MWALD	from than to ^a	(アメリカ英語とイギリス英語の違いについての記述あり)
MED ²	from to	
CALD ³	from	
CCADE	from to than	(アメリカ英語とイギリス英語の違いについての記述あり)
LDOCE ⁵	from to than	(アメリカ英語とイギリス英語の違いについての記述あり)
OALD ⁸	from to than	(アメリカ英語とイギリス英語の違いについての記述あり)
CollinsAM	from than	(thanはアメリカ英語で用いられるとの記述あり)
LAAD ²	from than	

^a 前置詞の並びの順は、エントリー中に掲載されている順に一致する(以下同様)。

前置詞from/than/toの3つを掲載している辞典は、MWALDを含む4つの辞典であるが、CALD³はfromのみを掲載している。Differentの後ろに用いられる前置詞についての情報をどの程度掲載するかについては、各辞典の教育的配慮によるものであろう。

(3) 'matter

The question “What’s the matter?” is usually asked in a friendly way. ▪ You look sad. *What’s the matter?* [=what’s wrong?] The question “What’s the matter with you?” is usually asked in an unfriendly way by someone who is annoyed or angry. ▪ You keep making stupid mistakes. *What’s the matter with you?* [=what’s wrong with you?; why do you keep making stupid mistakes?]

疑問文What’s the matter?とWhat’s the matter with you?の違いについての記述である。MWALDの例文*What’s the matter with you?*の後ろの角括弧内の情報も、この表現について学習者の理解を助けるであろう。比較した学習者用辞典には、こ

れら2つの疑問文の違いについての説明はなされていない。ただし、*OALD*⁸は **matter**のエントリー中に、*What's the matter with you today* (= why are you behaving like this) ? の例文と括弧内に書き換え文が掲載されており、*LAAD*²にも **matter**のボックスノート中に、*Don't be so rude! What's the matter with you* (=used when you are surprised or angry about what someone has said or done) ? のように例文と括弧に入った説明が掲載されている。しかしながら、*MWALED*は、*usage* paragraphで、what's the matter? と what's the matter with you? を並べて説明しており、両者の表現の違いが、学習者にはより理解しやすいと言えるだろう。

(4) ²used to

Used to is usually used in the form *use to* when it occurs with *did*. ▪ *Did you use to work there?* [=did you work there in the past?] ▪ *It didn't use to be like that.* ▪ *He didn't use to smoke.*

*MWALED*の²**used to**のエントリー中には、否定形の例文 *He never used to smoke. / (Brit, old-fashioned) You used not to smoke, did you?* が掲載されている。学習者は、これらの例文と共に *usage* paragraphを読むと、*used to*の否定形についてより理解しやすいであろう。

*Used to*の否定形 *never used to*, *didn't use to*, *didn't used to*, *used not to*に焦点を絞り、各辞典の掲載の有無と注記を比較してみよう。Table 2には、各辞典の *used to*のエントリー中の例文に最初に掲載されている否定形に◆のマークを付している。

Table 2 Never used to/didn't use to/didn't used to/used not toの掲載

never used to

MWALED ◆^a エントリー中例文掲載
*MED*² 掲載なし

*CALD*³ 掲載なし
CCADE 掲載なし
*LDOCE*⁵ エントリー中例文掲載 (*spoken*)^b
*OALD*⁸ 掲載なし
CollinsAM 掲載なし
*LAAD*² 掲載なし

didn't use to

MWALED *usage* paragraph中に例文掲載 (usually used in the form *use to* when it occurs with *did*)
*MED*² ◆ エントリー中、ボックス中例文掲載 (usually formed with 'did' + **use to** (with no 'd'))
*CALD*³ 掲載なし
CCADE エントリー中例文掲載 (especially in spoken English)
*LDOCE*⁵ ◆ エントリー中例文掲載
*OALD*⁸ ◆ エントリー中例文掲載 (The negative form is usually **didn't use to**, but in *BrE* this is quite informal and is not usually used in writing.)
CollinsAM エントリー中例文掲載
*LAAD*² ◆ エントリー中例文掲載

didn't used to

MWALED 掲載なし
*MED*² 例文掲載なし (sometimes used, but many people think that this is wrong)
*CALD*³ 掲載なし
CCADE エントリー中例文掲載 (especially in spoken English)
*LDOCE*⁵ 掲載なし
*OALD*⁸ 掲載なし
CollinsAM 掲載なし
*LAAD*² 掲載なし

used not to

<i>MWALED</i>	エントリー中例文掲載 (<i>Brit, old-fashioned</i>)
<i>MED</i> ²	エントリー中、ボックス中例文掲載 (In formal English, negatives are often formed with used not to . . .)
<i>CALD</i> ³	◆ エントリー中例文掲載
<i>CCADE</i>	◆ エントリー中例文掲載
<i>LDOCE</i> ⁵	エントリー中例文掲載 (<i>BrE</i>)
<i>OALD</i> ⁸	例文掲載なし (<i>BrE</i> also, <i>old-fashioned</i> or <i>formal</i>) (<i>rather formal</i> . . . only used in <i>BrE</i> , usually in writing)
<i>CollinsAM</i>	◆ 定義中used to notとused not toの形を並べて掲載、エントリー中例文にはused to notを掲載
<i>LAAD</i> ²	掲載なし

^a ◆は、used toのエントリー中の例文に掲載されている最初の否定形であることを表す。辞典によっては、否定形は1種類のみ掲載のものもある。

^b ()内は、各辞典に見られる注記。

Table 2を見ると、used toの否定形のうち、8つの辞典のうち、4つの辞典で、否定形の第1例文にdidn't use toが用いられている。アメリカ英語辞典である*CollinsAM*は、used to notを否定形の第1例文に、一方、同じくアメリカ英語辞典である*LAAD*²は、didn't use toを否定形の第1例文に掲載している。*MWALED*のみが、否定形の第1例文にnever used toを掲載している。Never used toについて、*PEU*³ (2005: 595) には、“the most common negative is *never used* . . .”とあり、Garner (2003: 810) には、“. . . remember the standard form that can save you headaches: *never used to*. It avoids the grammatical problem of *did* + [past tense]. It keeps *used*.”と述べられているように、never used toを用いることにより、didの後ろに過去形を用いる問題を避けることができる。

4.4 社会・文化などに関するもの

(1) ²female

The use of *female* to mean “woman” or “girl” now occurs most commonly in scientific or technical language. ■ According to the study, males scored about the same as *females*. . . In other contexts, it is often seen as a humorous or mildly insulting word. ■ The shopping mall was mobbed by herds of adolescent *females*. . .

名詞のfemaleの用法について、この語が科学などの特定の分野でよく用いられることと、その他の状況では、おどけた、あるいは少々、侮辱的な表現であるということについて記述がなされていることは、学習者にとっては役立つであろう。これら2つの点を記述しているのは、比較した学習者用辞典の中では、*MWALED*の他、*CCADE*と*CollinsAM*である。その他の辞典は、*MED*²のように上記のような記述の掲載がないか、あるいは、上記2点のうち、どちらか一方についてのみの掲載である。この語について*MWALED*が掲載している状況による単語の使い分けに関する注記は、学習者が英語を運用する上で有益であると言えよう。

5 まとめ

*MWALED*の*usage* paragraphsは49項目であり、その数は決して多くはないが、上級英語学習者が必要とする情報がよく盛り込まれていると言ってよいのではないだろうか。

学習者用辞典は、学習者が必要とする情報を掲載する必要がある。もちろん、スペースの問題もあり、すべての事柄を1冊の辞典に収めるのは不可能である。どの項目を掲載するのかにあたって、何を基準とするのか、*MWALED*がどのように学習者の傾向や、彼らの必要とするものを把握しているのか、またそれらをどのように辞典の記述に生かしているのか興味もたれるところである。英国の出版社がそれぞれ基づくコーパステータと、米国の出版社であるMerriam-Webster社が基づくコーパステータの今後の展開にも関心が寄せられよう。

2008年のMWALDの出版は、米国における英語学習者用辞典の新しい時代の幕開けを意味すると言えようか。米国は政治、経済など様々な面で世界的に影響をもっており、アメリカ英語が世界中で使用されていることは想像に難くない。米国出版社の学習者用辞典が今後、英国出版社による学習者用辞典と共にどのような発展を見せるのか楽しみである。

Notes

- 1) Hanks (2009) は、MWALDに掲載されている例文の中には、不自然なものもあると述べ、次のような例を挙げている。

The station *broadcasts* the symphony live every Friday night. (Hanks 2009: 309)
確かに、オーケストラが同じ曲を毎週金曜日に演奏し、しかも、ラジオ放送局が繰り返しこのオーケストラの演奏を放送するとは考えにくい。Hanks (2009) は、broadcastの用法を説明するのに、例文中のsymphonyの意味が誤って伝えられており、例文を作成するのであれば、この例文において、なぜsymphonyの代わりにconcertを用いなかったのかとの見解を示している。

- 2) その他、ボックスノートではないが、☆の付いたノートが本文中に埋め込まれる形で掲載されている。大まかな内容としては、語法、語句の説明、語源、文化・生活に関する情報などである。例を挙げてみよう。

³good adv, informal
1 chiefly US: ¹WELL 1 ■ Things have been going *good* lately. ■ The team is doing *good* this year. ■ “How did you hit the ball today?” “*Good*.” ☆ The use of *good* to mean “well” is considered wrong by many people. It occurs mainly in very informal speech.

また、語源情報も、☆の付いたノートとして本文中に掲載されている項目もある。

- 3) その他、本文中に *usage* paragraphs と同じくらいのサイズで、タイトルが付いていないボックスが9項目ある。それらは、次の通りである: **at**, **'bail**, **bring**, **'maybe**, **perhaps**, **'pull**, **'take**, **'throw**, **'turn**。これらのうち、**at** (e-mailのアドレスとat)、**'maybe** (可能性について)、**perhaps** (可能性について) 以外の項目は、フレーズやイディオムに関するものである。9項目のうち、**'take**のように、*usage* paragraphの項目名と重複するのは、**'take**のエントリー中に、*usage* ボックスと、タイトルが付いていないボックスの両方が掲載されているためである。

- 4) Tayfoor (2004: 17) に基づいて問題を作成。同書同ページには以下の説明がある。
To refer to a particular past situation, we use *was* / *were able to*. We don't use *could* (but *couldn't* is possible):
Even though the restaurant was crowded we were able to find a table. (not *could find*)
We *weren't able to* / *couldn't find* a table because the restaurant was too crowded.

References

Carter, R. and M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge

University Press.

Fontenelle, T. (ed.). 2008. *Practical Lexicography*. New York: Oxford University Press.
Garner, B. A. 2003. *Garner's Modern American Usage*. New York: Oxford University Press.
Hanks, P. 2009. “Common Sense Blossoms in Springfield, MA”. Review of *Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*, by Stephen J. Perrault (ed.). *International Journal of Lexicography* 22(3), 301-315.
Peters, P. 2004. *The Cambridge Guide to English Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
Ptaszynski, M. O. 2010. “Theoretical Considerations for the Improvement of Usage Labelling in Dictionaries: A Combined Formal-functional Approach.” *International Journal of Lexicography* 23 (4), 411-442.
Sinclair, J. (ed.). 2004. *Collins COBUILD English Usage*. 2nd ed. Glasgow: HarperCollins. (CCEU²)
Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press. (PEU³)
Tayfoor, S. 2004. *Common Mistakes at First Certificate*. Cambridge: Cambridge University Press.
Cambridge Advanced Learner's Dictionary. 3rd ed. 2008. Cambridge: Cambridge University Press. (CALD³)
Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English. 2007. Boston: Thomson Heinle. (CollinsAM)
Collins COBUILD Advanced Dictionary of English. 2009. Boston: Heinle Cengage Learning. (CCADE)
Collins COBUILD English Language Dictionary. 1987. London: William Collins Sons & Co Ltd.
Longman Advanced American Dictionary. 2nd ed. 2007. Harlow: Pearson Education Limited. (LAAD²)
Longman Dictionary of Contemporary English. 4th ed. 2003. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE⁴)
Longman Dictionary of Contemporary English. 5th ed. 2009. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE⁵)
Macmillan English Dictionary for Advanced Learners. 2nd ed. 2007. Oxford: Macmillan Education. (MED²)
Macmillan English Dictionary for Advanced Learners of American English. 2002. Oxford: Macmillan Education. (MEDAE)
Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary. 2008. Springfield, MA: Merriam-Webster, Inc. (MWALD)
Oxford Advanced Learner's Dictionary. 8th ed. 2010. Oxford: Oxford University Press. (OALD⁸)
Webster's Dictionary of English Usage. 1989. Springfield, MA: Merriam-Webster Inc.

Merriam-Webster's Learner's English Dictionary. 2010. Merriam-Webster, Inc.

<<http://www.learnersdictionary.com>>